

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第6章 預言者における祈り⑩



ヨナ



ヨナが神に用いられたのは、自分が祈ってもいないことを成し遂げるためでした。事実、ヨナは、ニネベの人々には、悔い改めて救われて欲しいと思ってはいませんでした。しかし、神がご自分のしもべに、普通は祈らないような何かをするよう依頼するときには、従順さが重要な要素となります。神のご計画においては、時として、誰も重荷を持たないような働きが求められます。そのため、ヨナに加えて同じ船に乗っていた人々は、神を求めなければならないような心配ごとが与えられました。海上で暴風雨に遭遇したのです。ヨナから、全ての元凶はどうやら自分がここにいることらしいと聞かされた異教徒の船乗りたちは、安全を求め、切迫した祈りを神に捧げます。「そこで彼らは主に願って言った。『ああ、主よ。どうか、この男のいのちのために、私たちが滅ぼさないでください。罪のない者の血を私たちに報いないでください。主よ。あなたはみこころにかなったことをなさるからです』」（ヨナ 1:14）。

これらの異教徒たちは、唯一のまことの神に切なる願いを捧げていますが、これを見る限り、旧約聖書の律法について、少なくとも何らかの知識があったことが見てとれます。というのも、律法では、無実な人の命を奪うことは、それを行った人物の責任となるからです。もちろん、彼らの非常に限られた知識では、深い理解に立って祈ることはほとんど不可能でしたが、彼らは立派なことに、それでも祈ったのでした。そして、ヨナとは異なり、彼らは同乗の人物に対する真摯な心配と、神への服従の心を抱いて祈りました。神は誰に対しても憐れみ深いお方です。暗愚な異教徒であろうが、悟りを得た聖人であろうが、とりわけご自分に呼ばれる人々に対してはそうです。彼らはみな、ご自分の子どもたちだからです(使徒 17:29 を参照)。

船乗りたちによって海に投げ込まれたヨナは、神が用意されていた大魚に呑み込まれます。自分が「墓の底」

(ヘブライ語では「シェオル」)にあり、まさに逃げようとしていた対象である神による超自然的なご介入がなければ助かる見込みなど全くない、というヨナの気持ちは理解できます。

私が苦しみの中から主にお願いすると、主は答えてくださいました。私がよみの腹の中から叫ぶと、あなたは私の声を聞いてくださいました。あなたは私を海の真ん中の深みに投げ込まれました。潮の流れが私を囲み、あなたの波と大波がみな、私の上を越えて行きました。私は言った。『私はあなたの目の前から追われました。しかし、もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです』と。水は、私ののを絞めつけ、深淵は私を取り囲み、海草は私の頭からみつきました。…私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思い出しました。私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます。しかし、私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえをささげ、私の誓いを果たしましょう。救いは主のものであります。(ヨナ書 2:2-5、7-9)

何千年もの歴史の中で捧げられてきた祈りの中でも、これほど常軌を逸した祈りはありません。というのも、この祈りが捧げられたところほど奇妙な場所で捧げられている祈りの記録はないからです。この印象的な祈りから得られる教訓は数多くあります。

第一に、祈りは、どのような時にどのような場所でお捧げしても大丈夫だということです。

全能なる方に聞いていただくのに、隔離された礼拝堂も崇高な大聖堂も必要ではありません。クリスチャンが神の絶えざるご臨在の中に留まっているならば、祈りは、台所の流しの前でも、混雑した路上でも、搭乗中の飛行機の中でも、車の運転中でも、野でも街でも、孤独な場所でも、群衆にもみくちゃにされる中でも、狐の穴でも、祈りの小部屋でも、聖堂でも、魚の腹の中でも、捧げることができます。祈りが語られる場所は、神が聞いてくださるという事実に影響を及ぼすことはほとんどないのです。

第二に、人にとって一番必要なものこそが、しばしば、何よりも優れた祈りをかき立てるものとなるということです。

神が知恵に満ちた摂理によって苦難や望まれない環境をお許しになっているのは、私たちにご自分に祈らせ、より頼むようにさせるためであるならばどうでしょうか。

第三に、そのような祈りが聞かれるものであるためには、従順が伴わなければならないということです。

反抗的な精神は、私たちの魂に大波をもたらしますが、服従は解放をもたらすのです。

第四に、祈りとは信仰を働かせることです。それはヨナのためでした。彼は主を思い出し、その聖なる神殿を再び仰ぎ見ることを約束します(2:4、7を参照)。

神に対する心からの信仰の無いところ、神に対する祈りもほとんどありません。信仰を駆り立てて行動を起こさせるためには、時として嵐が必要になることもあるのです。

第五に、祈りは確信をもたらします。

ヨナは「祈り通しました」。その結果、たとえまだ魚の腹の中にあっても、あたかも既に解放されたかのように語る事ができたのです。

最後に、深いところからの祈りは、高いところで聞かれます。

「私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました」(2:7)。深いところは、人間の体験としては稀なものではありません。ある人にとっては、それは悲しみの深みであり、ある人にとっては苦難の深みです。ある人々にとっては罪の深みであり、ある人々にとっては心の苦悩の深みです。しかし、いと高きところから人間の叫びが聞こえないような深みは無いのです(詩篇 107:23-28、139:8-10 を参照)。

一方、自分が願っているように神が行動してくださらないと、それは大きな失望となります。ヨナは、自殺すら考えるほどの絶望を体験しました。

ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわざを思い直されることを知っていたからです。主よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましですから。(ヨナ書 4:2-3)

ヨナは、預言が成就したことで評判の良い預言者です(列王記下 14:25 を参照)。彼は、ニネベに戻って何も起こらなければ人々がどう言うかがわかっていました。彼は、自分がどのような神にお仕えしているかはわかっていましたが、神の評判よりも自分の評判を気にしていました。彼は、個人的に恥辱だと思っていたことに向き合うことができませんでした。彼が一貫してわかっていたように、神はニネベをお救いになりました。彼は失望し、死を願いましたが、それは誤った祈りでした。しかし、率直な感情を神にぶつけたのは正しいことでした。神は彼に一つの洞察をお与えになりましたが、それは今日まで、宣教の働きに大きな示唆と励ましを与えてくれるものとなっています。神は彼を本当に優しく取り扱ってくださったのです。





質問

- 1 神は、私たちが祈ってもいないことであっても私たちを用いてそれを実現なさるときがあります。
そのために必要なのは何ですか？あなたは、自分が祈ってもいないことのために、神が自分を用いて下さったという経験がありますか？
- 2 ヨナと同じ船に乗っていた異教徒の船乗りたちは神に祈りました。
彼らの祈りから何を学ぶことができますか？
- 3 ヨナは神が用意されていた大魚の腹の中で祈りました。ヨナの祈りから6つの教訓を学ぶことができます。
その中で、あなたが特に学ぶべきこと、見習うべきことは何ですか？
- 4 ヨナが4章でささげた祈りは誤った内容のものでした。それでも彼の祈りには正しい点がありました。
それは何ですか？あなたも同じように祈ったことがありますか？ その結果、どうなりましたか？
- 5 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

天の父なる神さま。祈りの中であなたへの従順を学ぶことができますように。どこにいても祈ることができる恵みのおかげで、望まれない環境にいてもあなたを信頼することを学ばせて下さい。祈る内容自体は誤っていても、率直に祈る正しい態度をいつも保つことができますように。